

## 兵庫県たつの市における踏査成果

岸本 道昭（たつの市立埋蔵文化財センター）

本研究報告に掲載した古墳は、2022 年 3 月刊行の兵庫県遺跡地図に登載されていない。発見の経緯は CS 立体図による視認によって現地を確認したもので、新規発見の埋蔵文化財包蔵地である。これらの古墳を解説するため、仮の名を与えて記述する。

なお、たつの市では CS 立体図の観察と現地踏査を重ね合わせることで多数の古墳が新たに発見されている。2023 年度中に他の新発見遺跡や古墳と合わせ、まとめて手続きをおこなって、周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登載予定である。

### 井関三神社裏山遺跡（いせきさんじんじゅうらやま）

人為的な削平した地形が認められるものの性格は不明である。

### 中垣内平見古墳（なかがいちひらみ）

たつの市揖西町中垣内の小字平見の西側山塊、尾根上に位置する単独墳である。以前から CS 立体図の観察によって明瞭な隆起地形が認められ、古墳の存在を予想していた地点である。本研究調査の機会に現地を確認した。

径約 15 m の円墳で、現地の観察では南西側（尾根の高い側）に造り出しが付属する。CS 立体図でも注意深く観察すると墳丘周囲の整形が尾根部で途切れ、わずかな高まりが造り出しの存在を裏付けている。墳丘には外護列石または葺石様の石列が一部に見られる。墳丘上部は盗掘または石材奪取によって大きく損壊し、石室の天井石は失われ、玄室上半部が破壊されている。観察可能な範囲で測ると南北約 5 m、東西約 3 m の長方形玄室で、羨道を南に向ける横穴式石室である。

西播磨における横穴式石室墳は 6 世紀後半以降に盛行し、いわゆる群集墳を形成することが一般的である。本墳は単独墳で、しかも尾根の高い位置に築造されている。その意味で群集墳以前の古墳立地を踏襲している。はたして、横穴式石室を詳しく見ると使用石材は小ぶりで、角を消した持ち送りが北東隅に見られ、古式の積み方が明確である。

さらに、中垣内平見古墳は造り出し付き円墳または帆立貝式古墳と推定され、6 世紀後半以降の横穴式石室墳には少ない墳形である。当地域における横穴式石室の採用は 6 世紀前半とされ、導入期の横穴式石室墳と評価できる。その意味で立地と形態は中期古墳の伝統を保ちながら、埋葬施設は新来の石室を採用する点で重要な古墳である。こうした古墳が新規に発見されたことは、地域の古墳築造の動向を探るうえで貴重な資料となる。

### 台山 11 号墳（だいやま）

的場山はたつの市中心部を見下ろす山塊であるが、南は揖西町小神、北および東は龍野町北龍野、西は揖西町中垣内にまたがる。現在は的場山と呼ばれているが、近代までは臺山（台

山)と呼ばれていた。山塊には尾根を中心に古墳が散在し、現在のところ台山1～10号墳まで10基を数えている。ところが近年、新たに本研究調査も含めて数基の古墳が確認され、11号以降の番号を付して記述する。

的場山山頂から西へ延びる尾根上の頂部、標高286mに位置する。古墳としてはかなりの高所である。以前からCS立体図で明瞭な円形隆起と周囲の整形を認めて古墳の存在を予想し、2022年3月に現地踏査して古墳と認定した。今回はその再確認である。

周囲に古墳の見当たらない単独墳で、径約20mの円墳と判断する。周囲の自然地形を整形してやや平坦化した後、墳丘を盛り上げている。墳丘斜面には微妙な傾斜変換が観察され、墳丘は2段築成と推測される。また、北側に墳丘に付属する張り出しが存在するようにも見え、造り出しの付く円墳かもしれない。墳頂部にわずかな陥没が見られるが、大きな損壊は受けていないようである。

2023年9月14日の再踏査で、墳丘上面の各所で須恵器小片を9片採集した。甕の破片で、外面はタタキ目に細かいカキ目、内面は青海波文が残っており、6世紀前半と推定する。墳頂の陥没を盗掘痕とすれば、そのさいに持ち出された須恵器片ではないだろうか。腰高な墳丘ではなく、大きな石材なども観察できないため、埋葬施設は横穴式石室ではなさそうである。この地域の横穴式石室導入が6世紀前半以降とされており、須恵器の時期とも照合すると、古墳の時期は6世紀前半と考えられる。

#### 台山12号墳

台山11号墳の位置からさらに西へ延びる尾根の端部に位置する。以前からCS立体図で明瞭な隆起地形を認めて古墳の存在を予想し、2022年3月に現地踏査して古墳と認定した。今回はその再確認である。

古墳は径約10mの円墳である。墳丘の中央から南にかけて掘り崩され、損壊が著しい。なお、損壊部に石英閃緑岩の大石が多数認められ、南に開口する横穴式石室の残骸と考えられる。当初は周囲に古墳が見られない単独墳と考えていたが、南側斜面部に後述する13号墳と14号墳の2基を確認した。

#### 台山13号墳

台山12号墳から南南東より下った斜面に位置する。CS立体図でもわずかな隆起と掘り割りの存在が視認できていた。北側に馬蹄形の掘り割りを有する径約7mの小円墳である。外護列石状の石積みが南面は直線状に並ぶため、方墳とも考えられる。墳丘には石室材と思われる石が散乱し、天井石らしい石材の並列も認められる。埋葬施設は小型の横穴式石室ではないかと推定され、7世紀代の終末期古墳と推測する。

#### 台山14号墳

台山13号墳の南西側にほぼ隣接した円墳である。北側に掘り割りを有する小円墳で、小

型の石室を内蔵する終末期古墳と考えられる。CS 図ではわずかな陰影が見える程度で、明確に古墳と視認することはできなかった例である。

#### 榑神社裏山 2 号墳（なぎじんじゅうらやま）

榑神社裏山 1・2 号墳は、たつの市神岡町沢田に位置する榑八幡神社の北側、東西に延びる低平な丘陵上に存在する。兵庫県遺跡地図では遺跡番号 120070（1 号墳）、120071（2 号墳）として 2 基の古墳が登載されている。1 号墳が東側、2 号墳が西側である。ところが 2022 年 2 月に CS 立体図による古墳探索を進める過程で、1 号墳との間に 2 号墳から延びる高まりが存在し、円墳ではなく前方後円墳のように見えることがわかった。ただちに現地踏査をおこなったところ、2 号墳は前方部を東に向けた墳長約 30 m の前方後円墳と確認できた。1 号墳は小円墳で、2 号墳の前方部東側に位置する。今回の報告はその再確認踏査である。

榑神社裏山 2 号墳は、広い鞍部をもつ尾根上に位置し、尾根がやや高くなる東側に前方部に向けた立地を採る。後円部径は約 20 m、くびれ部は曲線を描くように狭く造られ、前方部はゆるやかに高まりながら裾が広がるように観察される。墳丘表面が露出している部分もあるが、明瞭な葺石や遺物の散布などは確認できない。西播磨地域に分布する前期の前方後円墳と類似した特徴を備えており、前期古墳と考えられる。

本墳は、すでに周知の埋蔵文化財包蔵地となっているが、CS 立体図による観察で、円墳ではなく前方後円墳と判明した例である。前方後円墳は限られた首長墳であり、新たな発見は首長墓系譜や系列を論じるうえで再検討を迫ることになる。榑神社裏山 2 号墳の発見は、揖保川流域にもともと多い前期前方後円墳の数をさらに増加させたこととなり、その歴史的価値は極めて高い。

#### 沢田王子神社裏山 1 号墳

榑八幡神社の対面、南側の山塊の北東側で、北へ延びる尾根上に位置する。CS 立体図ではかねてから古墳状の隆起を 2 か所確認していた。

1 号墳は尾根の北東端に位置する。低平であるが墳丘北東側は明瞭な隆起を認め、径約 10 m の円墳と考えられる。

#### 沢田王子神社裏山 2 号墳

南側の山頂から下ってきた尾根が傾斜を変換する根元に位置する古墳である。墳丘南側は明確な区画を示さないまま尾根に続いているが、北東側は墳丘の盛り土整形が明瞭で、明らかに古墳と認められる。径約 10 m 程度の円墳である。

#### 沢田王子神社裏山遺跡

2 基の古墳が位置する尾根の南側頂部にある。CS 立体図では特に注意すべき地形を認め

ていなかったが、踏査中の山道に弥生土器片が散布していることがわかった。土器片は摩耗が少ないため、それほど動いていない。山頂部およびその周囲において弥生遺跡が存在することは確実である。山頂部の周囲には段状の凹凸もあり、建物跡などの痕跡かもしれない。土器片は壺形土器の頸部があり、凹線文が認められるため、弥生中期後葉の集落遺跡と考えられる。

揖保川流域には意外な高所にも弥生土器や石器がみられる遺跡があり、いわゆる高地性集落は多い。本遺跡もその仲間に加えることができる。この遺跡は、CS 立体図の観察による直接的な発見ではないが、踏査の副産物として新たな遺跡発見も期待できる例である。